

(続日本紀)

とあるように、寺の持つてゐる多くの田・野を「占有すること
はならん」というお触れを出し、天平十八年(七四六)には百
姓の田地を争つて買い集めるといふ、檀越だんおつの横奪だんおつぶりが伺え
る。これらの背景から、小田富士雄は「九州の初期寺院跡を四
か国あげ(豊前・筑前・肥前・肥後)、官寺、準官寺的性格を持
つ寺院を除けば、ほぼ一郡一箇寺的な分布傾向が見られること
から檀越となつて建立した氏寺的性格を持つ寺院である」と述
べられており、寺領を増やすことによつて寺院建築への影響が
大きかつたものと思われる。いずれにしても八世紀代になつて
の寺院は仏教思想が薄れ始め、その役割は変貌しつつあつたの
である。

三 豊前地方の古代寺院

寺院各説

ここで記す寺院は奈良時代から平安時代にかけて
て存在した豊前地方の寺院跡である。前述した
ように、その大部分は七世紀代に建立されたと考えられる朝鮮
半島系の渡来人に関わる寺院と、畿内文化を導入した寺院等が
見られ、双方が融合して特異な文化圏を形成しているのが豊前
地方の特徴と言える。記述する主な寺院は以下のとおりであ
る。

一、天台寺跡

二、椿市廃寺跡

三、木山廃寺跡

八、小倉池廃寺跡

四、上坂廃寺跡

九、弥勒寺跡

五、垂水廃寺跡

十、法鏡寺跡

六、相原廃寺跡

十一、虚空蔵寺跡

七、塔の熊廃寺跡

また、豊前国分寺跡、菩提廃寺跡は後述する。

一、天台寺跡(上伊田廃寺)

本跡は、田川市大字伊田六七五の一に所在する。寺跡は、彦
山川と金辺川の支流である御祓川に挟まれた標高四〇から五〇
メートルの台地上に位置する。

天台寺跡は、太平洋戦争前まで塔・金堂・講堂の基壇とともに
礎石等が残っていたが、戦時中(昭和十八年)にグライダー
の滑空練習場のため、礎石は地中に埋められ、寺地は戦後畑と
して利用された。

既往の調査は昭和五年、山本通により礎石等の配置図が発表
され、法起寺式の伽藍配置ではないかと推定された。翌年には、
同氏によつて天台寺瓦窯が調査されている。その後、昭和
三十五年二号瓦窯跡が九州大学、県、市等で発掘調査され、有
階有段登窯であることが確認されている。本格的調査は昭和六
十から六十三年に実施され、伽藍配置等が明らかにされた。

調査の結果、金堂・講堂、塔、回廊等の存在が明らかになつ
た。金堂跡では礎石二七個を検出し、東西幅五〇尺、南北幅四

五尺の四面廂の建物基壇が復元可能と判断されている。講堂は礎石一五個を検出したが、全て移動しており、基壇確認は掘り込み事業から判断されている。鏡山猛は、残存する礎石から二間×六間で、柱間寸法一二尺の建物を復元しているが、その位置は定かでなく、建物範囲東西九二尺、南北五八尺を推定するにとどまっている。塔は心礎と礎石八個を検出し、現位置は保っていないかった。結果では、鏡山猛が計測した金堂との心々距離一〇一尺と符合し、三間×三間で柱間寸法中央間が六・五尺、脇間六尺が復元されている。また、塔跡は回廊跡と重複関係にあり、塔跡が後出することが確認された。このことから塔は創建期には存在せず、回廊が廃絶した後から建立されたことが明らかになった。回廊跡は東・西・南・北回廊において、掘立柱の二本柱列が確認されている。回廊心々距離は東西で一八二尺、南北で二二一尺である。

以上のことから、創建期における天台寺の伽藍配置は、金堂と講堂が中軸線をほぼ真北にとり、中門から掘立柱の回廊が巡り講堂に接続することが判明した。したがって、塔はある時期に、回廊が廃絶された後に建立されたことになる。

主な出土遺物は須恵器、土師器のほか、多量の瓦類と風招、九輪片が発見されている。瓦は従来から新羅系、百済系、高句麗系が知られ、流麗な複弁八弁蓮華文軒丸瓦と宝相華文軒平瓦の組み合わせが創建期の瓦と考えられていたが、調査の結果か

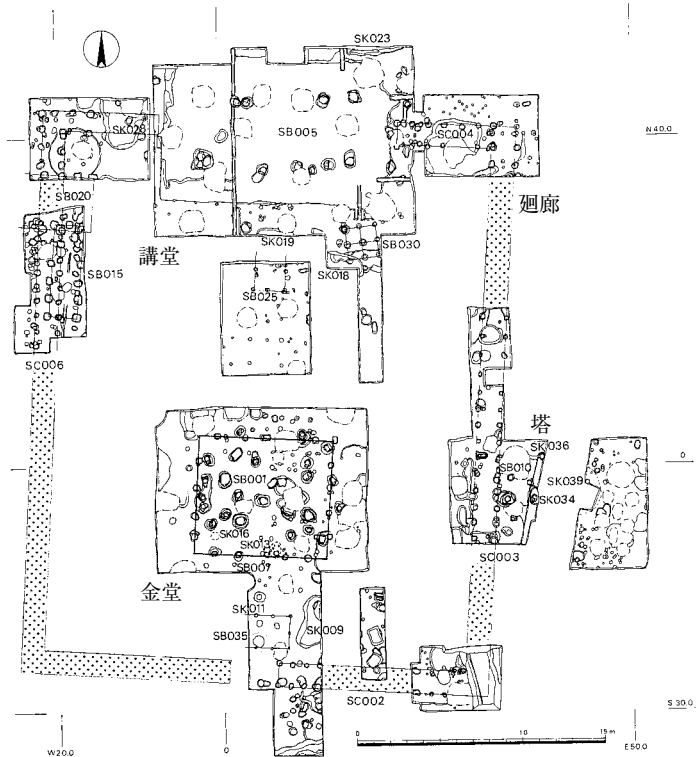


図3—6 天台寺跡遺構配置図

ら単弁八弁軒丸瓦の出土率が高いことを理由に、創建期瓦の見直しが提起されている。軒丸瓦は五型式一〇八点、軒平瓦は三型式五種類三六点出土している。时期的にはいずれも七世紀後半代で、塔跡の出土瓦から、寺院造営後間もない時期に塔は建てられ、創建期の軒瓦が葺かれたと考えられている。

天台寺瓦窯跡は田川市鎮西町伊田に所在する。窯跡は天台寺

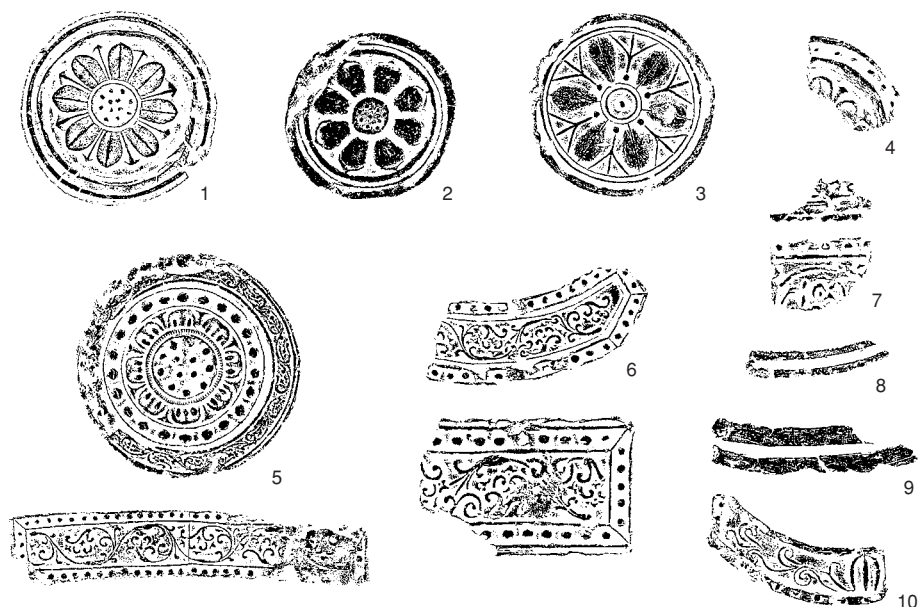


図3—7 天台寺跡出土軒先瓦

の南東約三〇〇メートルに存在し、地下式有段登窯である。二基確認調査されており、天台寺への供給が明らかになっている。

二、椿市廃寺

本跡は行橋市大字福丸字上長町に所在する。寺跡は、京都平野の北西部にあり、標高二〇～二五メートルの扇状地上に位置する。現在は天台宗の願光寺が存在し、その山門周辺には塔心礎や礎石が集められている。

既往の調査は昭和三十一年に小田富士雄らにより遺跡測量調査が行われ、四天王寺式伽藍配置が想定されている。その後、二次にわたり、昭和五十二年から三年継続調査と、平成四年度以降に、圃場整備事業の一環として実施された。この願光寺については『太宰管内志』舊記に

京都郡黒田郷福丸村、内有古刹號叡山願光寺僧行基経歴諸国之時草創當寺云今時所安置之薬師佛乃行基之刻當寺往昔有七堂伽藍罹天正之兵火悉為灰燼其礎今猶在田間

と記されており、早い時代から七堂伽藍を呈した寺院の存在が注目されていたことが分かる。

調査の結果、寺域は一町半四方と推定され、塔・金堂・講堂・回廊等が明らかにされ、各建物が一直線に並ぶ四天王寺式伽藍配置であることが分かった。なかでも講堂跡が比較的保存が良く、基壇化粧は玉石積で、東西約五九尺、南北約八六尺を測り、東西七間×南北四間の四面廂建物が想定されている。金

堂跡は明確な基壇は検出できなかったが、瓦礫敷きの範囲などから東西五五尺、南北五〇尺程度の建物が復元されている。塔跡は削平が著しく、周辺部に溝等を検出した。回廊跡は掘立柱で寸法等に若干の出入りはあるが一辺六〇^{センチメートル}程度の掘形を呈し、講堂妻部中央に取り付くことが想定されている。

以上のことから、椿市廃寺は京都郡内の最有力郡司級の豪族寺院と考えられるのである。その首長拠点は大型古墳の存在や有力豪族（郡司等）を考えると、小字名が残っている勝山町黒田周辺が有力視され、行橋の方へ移ったのではなからうか、との見解もある。

時代はやや下るが天平十二年（七四〇）九月条には「京都郡大領外従七位上栲田勢麻呂」の名前が見え、（正しくは「栲田勝勢麻呂」）藤原広嗣の乱の時に兵五百騎を率いて官軍に帰順した功績がある。勝勢麻呂の「勝」は、前記したように村主の意味を持ち渡来系の姓であることが分かっていることなどを勘案すると、椿市廃寺の創立者は栲田勝勢麻呂の二、三代前の人物との見方も出てきている。

主な出土遺物は、弥生から古墳時代の土器と須恵器・土師器、更に塑像螺髪・金属金具類、白釉緑彩陶器等と多量の瓦類である。瓦は、朝鮮系瓦の百濟・新羅・高句麗系の軒先瓦が出土していると共に、平城京出土軒丸瓦、六二八四型式と同範の瓦が発見されている。創建期の瓦は百濟系八弁単弁軒丸瓦と

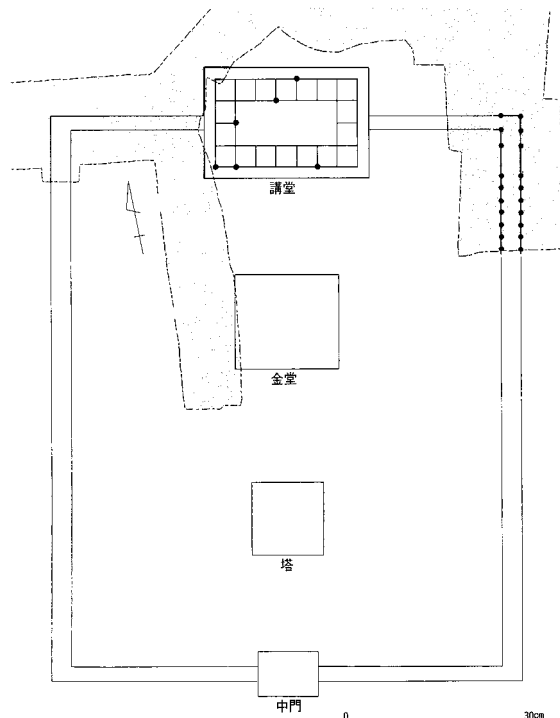


図3—8 椿市廃寺跡伽藍配置復元図

重弧文軒平瓦の組み合わせが考えられ、ほかに鴟尾^{しび}数点^びが出土している。

以上のことから、寺院の存続年代を七世紀末から九世紀ごろまでにとらえられ、比較的短い寺院の存続であった可能性があら。

三、木山廃寺

本跡は京都郡犀川町大字木山五九一番地に所在する。寺院跡は今川中流域の北西部に位置し、周辺には古墳が点在している。

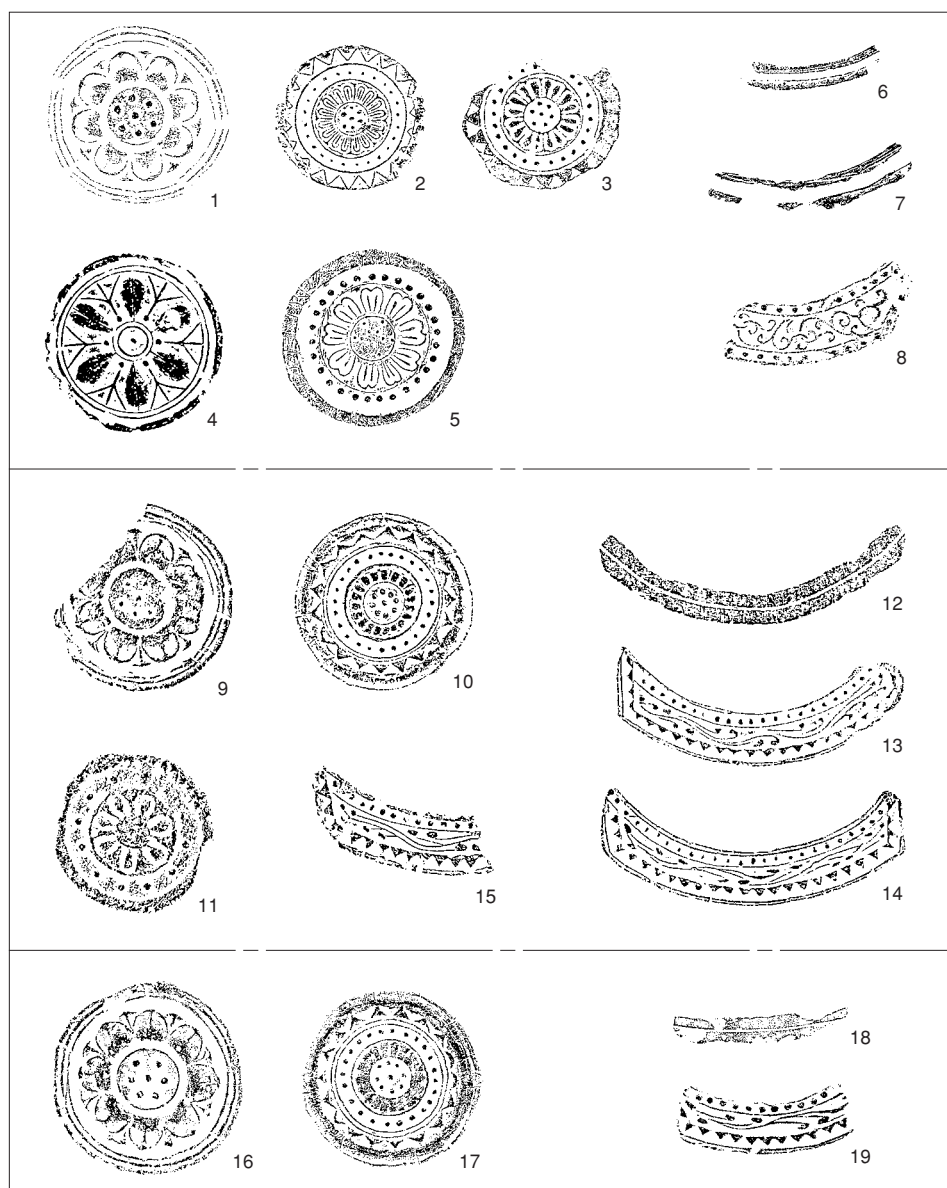


図3—9 京都郡古代寺院軒先瓦

椿市廃寺跡（1～8）、上坂廃寺跡（9～15）、木山廃寺跡（16～19）

昭和九年、当地域の土地改修事業の際に多量の瓦と塔心礎が発見されて以来寺院跡の存在が知られてきた。調査は昭和四十九年にトレンチによる調査を実施しているが、瓦溜まりや溝等を検出したほか主な遺構は発見されていない。他に集落北東部に塔心礎を半裁にし、石碑に転用したものが残っている。石は長さ一・八¹/₂、幅〇・九¹/₂、厚さ〇・八¹/₂の花崗岩で、心礎径は約五¹/₂が復元されている。心礎側面には「明治九年丙子四月」と刻まれており、塔心礎が動かされたのが分かる。

出土遺物は、土師器・円面硯のほか、軒丸瓦二点、軒平瓦三点と多量の丸・平

瓦が出土している。軒丸瓦は百済系のもので、単弁八弁で重弧文軒平瓦との組み合わせが考えられている。もう一組は、複弁九弁軒丸瓦と偏行唐草文軒平瓦のセット関係瓦である。このほか、寺院の東端に輪藏心礎がある。経巻を納めた輪藏の中軸を受ける礎石であり、古い時期のものと考えられている。この寺院の時期は出土瓦等から八世紀が与えられている。

生産瓦窯は、寺院から北西約一¹⁰の位置に福六瓦窯跡が分かっている。地番は京都郡犀川町木山である。窯の構造は不明だが二か所確認されており、百済系軒丸瓦や老司式の流れをくむ軒丸・軒平瓦等が発見されている。

四、上坂廃寺

京都郡豊津町大字上坂九六番地に所在する。京築平野の東部を流れる祓川が蛇行する左岸沖積地に遺跡は位置する。

従来から塔心礎が確認され、付近からの古瓦の出土により寺院跡の存在が指摘されていた。昭和五十八年、県営圃場整備事業に先立ち、寺院跡の確認調査が実施され、塔・金堂・講堂等を推定できる資料を得た。塔跡は基壇こそ発見できなかったが、塔心礎直下は径二・五¹¹の掘り込み事業を行い、版築していることが判明した。金堂跡では、瓦溜まり溝の検出により、版築状況は確認されなかったものの、外幅二七・五¹²、内幅一七・五¹³の区画を確認し、塔との位置関係から金堂跡と推定されている。講堂跡は、地元民の話を手掛かりとして、塔跡心礎

から北側に二七・五¹⁴離れた位置に礎石を確認した。このことから、建物相互の位置関係を想定すると、観世音寺若しくは法起寺式の伽藍配置が推定される。

出土遺物は軒丸瓦・軒平瓦と多くの丸・平瓦である。軒丸瓦は三種類、軒平瓦は四種あり、創建期瓦は単弁八弁軒丸瓦と重弧文軒平瓦の組み合わせが考えられている。寺院の時期については、出土瓦等から七世紀末から九世紀前半ごろの年代が与えられている。

五、垂水廃寺

垂水廃寺は築上郡新吉富村大字垂水字寺の後に所在する。寺院は中津平野の北西部にあり、山国川左岸の段丘上に位置する。従来から百済系・新羅系の瓦が発見されていることから、寺院の存在が注視されてきた。

これまでの発掘調査は、昭和四十八～五十年と平成五年の二回実施されている。調査の結果、南北約一六¹⁵、東西約一六¹⁶以上の掘り込み事業遺構が検出され、柱座作出しの礎石と建物西側から塑像残片が発見されていることを勘案して、基壇と判断している。寺域とした根拠は、築地方向が北から三四度一分東に振れているのを寺院の基準とし、条里遺構と数字的におかた符合することから方二町と想定するに至っている。このことは平成五年度の調査においても溝等の検出から再確認されている。しかしながら、築地とした極めて薄い黄色土（整地層

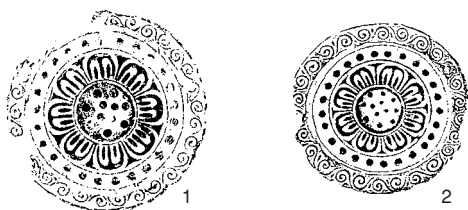


図3—10 垂水廃寺跡出土軒丸瓦(1)
塔の熊廃寺跡出土軒丸瓦(2)

と判断)の残存状況や金堂跡と判断した基壇範囲の状況から、ここに再び検討を要する必要があることを提起しておく。

出土遺物は軒先瓦、丸・平瓦と塑像残片である。軒先瓦は、百済系瓦と言われる単弁八弁軒丸瓦と重弧文軒平瓦のセット関係瓦と、新羅系の複弁八弁軒丸瓦と偏行唐草文軒平瓦の組み合わせが出土している。単弁八弁軒丸瓦は豊前地方の各寺院で見られており、これらの相関関係が今後の課題となっている。出土瓦等から寺院の創建は七世紀末ごろが与えられる。

生産瓦窯は、寺院から約二・五[※]ほどの南西丘陵上に友枝瓦窯跡、山田窯跡、照日窯跡、桑野原瓦窯跡等が分かっている。

友枝瓦窯跡は、築上郡大平村大字西友枝字瓦ウドに位置する。大正二年に発見され、同十一年に国指定史蹟として保存されている。窯は地下式有階有段登窯で、焼成部長さ六・一五[※]、最大幅一・九四[※]、一七段を確認調査されている。

山田窯跡は、築上郡新吉富村大字安曇字照日に位置し、友枝瓦窯の北方にある瓦陶兼業窯である。

窯跡は計三基発見され、半地下式

登窯で、焼成部のみ残存しており長さ六・四[※]である。

照日窯跡は、築上郡新吉富村大字安曇字照日に位置し、山田窯跡の西側にある。計四基確認され、うち一基が瓦陶兼業用である。平瓦三枚が出土し、時期は須恵器から七世紀第5四半期が与えられている。

桑野原窯跡は、築上郡新吉富村大字宇野字桑野に位置する。垂水廃寺から南へ約一・二[※]の所にあり、瓦陶兼業用である。他の窯生産と異なり縄目瓦を主として生産している点が注目される。

六、相原廃寺

大分県中津市大字相原に所在する。寺院跡は一級河川山国川の右岸段丘にあつて、寺院北側の貴船神社境内には十数個の礎石が残り、石垣等に転用され、東側の瑞福寺には塔心礎が保存されている。

発掘調査は昭和六十三年から数回にわたり実施され、寺域・主要・建物等確認調査が行われている。その結果、乱石積基壇建物一棟及び瓦溜まりや、溝等の検出によって建物一棟の存在を想定させる遺構が発見されている。乱石積基壇建物は周囲が宅地で、全貌を明らかにしえない悔しさがあるが、基壇は版築の痕跡が明瞭に残っている。二棟の建物の規模・配置等は定かでない。

ただ、昭和二十九年に賀川光夫らがこの付近一帯を測量・踏

査した結果、法隆寺式伽藍配置を想定している。

出土瓦は、百済系の単弁八弁軒丸瓦と重弧文軒平瓦の組み合わせが創建寺の瓦と考えられており、他に二種類の軒丸瓦が出土している。これらの瓦から寺院の時期を七世紀後半ごろに推定できる。

生産瓦窯は、寺院跡から東へ約五・五^米離れた所に伊藤田ホヤ池瓦窯跡が所在する。瓦陶兼業窯一基、瓦窯二基の計三基が確認されている。このホヤ池瓦窯の右岸には踊ヶ迫窯跡群が存在する。この窯跡を発見した前原平三郎らは、検出した瓦等から相原廃寺や垂水廃寺へ供給したと関連づけている。

七、塔の熊麿寺

下毛郡三光村上株に所在する。遺跡は一級河川山国川の左岸段丘上に位置し、昭和六十三年に圃場整備中に、徳永新一によつて軒平瓦・丸瓦・平瓦等が発見され、脚光を浴びた。その後の発掘調査により基壇状の遺構及び溝等が発見され、互等は溝から多く検出している。

出土遺物は須恵器のほか、軒丸瓦、鬼瓦と多くの丸・平瓦類である。軒丸瓦は垂水廃寺跡の軒丸瓦と文様形態を同じくするもので、山国川を隔てた相互の寺院関係に興味を持たれている。瓦は複弁八弁軒丸瓦で、外区周縁に垂水廃寺と逆回り（右回り）の唐草文が巡っている。瓦当径もひと回り小さくなる。また、鬼瓦は目・鼻・大きく開いた口などの鬼面の作りは新羅

系の鬼瓦に類似している。以上の出土遺物等から、寺院の創建年代を八世紀前半代に与えられている。

八、小倉池廃寺

大分県宇佐市四日市大字上元重に所在する。遺跡は宇佐平野南方の丘陵地端部に位置し、小倉池南端の水中に礎石建物が眠っている。渇水時には残存する計八個の礎石が露出し、基壇を含む地形等が観察可能である。

発掘はされていないが、露出している礎石及び基壇側石等から、幅約一二^米・長さ約一八^米の基壇規模で、桁行五間・梁行四間の四面廂建物が復元できる。基壇周辺には瓦片が散在し、弥勒寺跡と同類の複弁七弁軒丸瓦や法隆寺系忍冬唐草文軒平瓦等が採集されている。『太宰管内志』小倉山豊前之十一の項に

宇佐郡元重村上古有大伽藍則七堂伽藍也 云々

とあって、七堂伽藍が存在したことを述べている。出土瓦等は奈良時代のものであり、創建時期は七世紀から八世紀代が考えられている。

九、弥勒寺（弥勒神宮寺）

大分県宇佐市宇佐神宮境内に所在する。宇佐神宮境内の西南隅に位置し、古文書等から造営年次を追うことが可能である。

・神亀二年（七二五）菱形宮の東に弥勒禅院を造る。

・天平九年（七三七）禅院を宮の西に移し弥勒寺を建てる。

・天平十年（七三八）金堂・講堂を建立する。

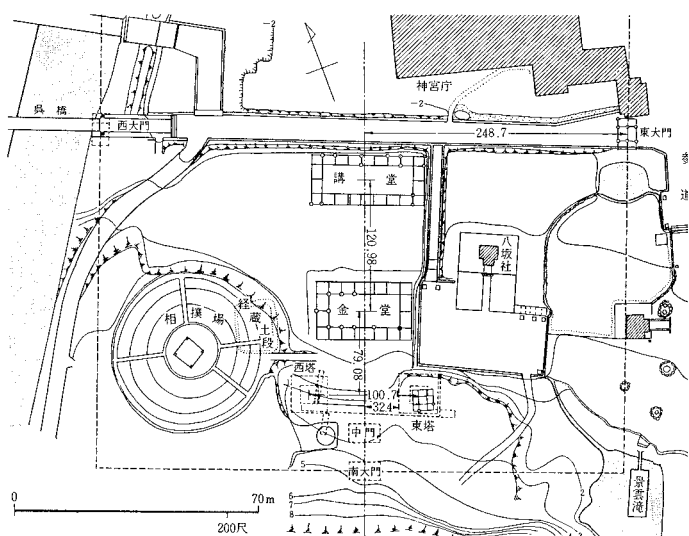


図3-11 宇佐・弥勒寺地形図

『九州考古学研究』小田富士雄より引用

- ・天平十三年（七四二）三重塔一基を寄進
- ・天平十五年（七四三）東西塔を建立

（後略）

建立から東西塔建立までを記したが、宝龜十年（七七九）には寺鐘が鑄造されており、このころに弥勒寺の完成時期を想定している。

発掘調査は昭和二十九～三十五年度にかけて実施された。中

門の北に東西両塔を配し、その北には金堂・講堂が置かれるという薬師寺式伽藍配置をとっている。金堂跡は七間×四間、講堂跡は九間×四間の東西棟であることを確認され、講堂跡は中世になって

両端間口を一増やしていることが明らかにされている。東塔跡は、栗石積基壇で一辺が三九・四五尺を測り、周囲に二尺の石敷きの雨落ちを巡らしていることが分かった。寺域は約五〇〇尺四方が考えられ、北側には寺域を画する東西溝が走りその南側に築地が巡っていたと想定されている。

出土瓦は、鴻臚館系瓦や虚空蔵寺跡から出土する複弁七弁軒丸瓦・法隆寺系の忍冬唐草文軒平瓦等が創建時瓦として位置付けられ、他に百済系瓦・複弁六弁軒丸瓦・複弁十弁軒丸瓦などが発見されている。

当寺の生産瓦窯は尻掛瓦窯が推定されている。窯跡は宇佐市大字北宇佐字尻掛にあつて、鴻臚館式の軒平瓦が一点採集され、瓦はほとんど縄目叩きであることが確認されている。

一〇、法鏡寺

宇佐市大字法鏡寺字畑成・屋敷に所在する。遺跡は市内中央を流れる駅館川中流域の左岸微高地にあつて、早い時期から瓦等が発見され、注目されてきた寺院である。

発掘調査は圃場整備事業に伴った事前調査で、昭和四十六年、同五十～五十一年にかけ小田富士雄らによつて実施された。従来からの礎石が原位置を保っており、それらを手掛かりに掘り込み事業による版築基壇が確認され、二棟の建物跡が検出されている。版築基壇建物は東西一四・六メートル×南北一一メートルの規模を有し、配置状況から金堂跡と判断。もう一つの建物は東

西約三〇^{トイ}×南北一七^{トイ}の規模を有し、礎石六個が確認され身舎八間×四間の四面廂建物で、講堂跡と判断された。講堂跡は、基壇版築下層から奈良時代の土器・瓦等が出土したことから、建替えがされたことが明らかになった。寺域は西方で検出された溝及び掘立柱列（柵列）等から、東西一二〇^{トイ}×南北一五〇^{トイ}に及ぶであろうと推定されている。以上の建物の配置関係から金堂跡の西側に塔を想定しており、法隆寺式伽藍配置が考えられている。

出土遺物は須恵器・硯のほか多量の瓦類が出土している。瓦類は、百済系と称する八弁単軒丸瓦、法隆寺系の忍冬唐草文軒平瓦、鴻臚館式軒丸瓦等が発見されている。出土遺物等から寺院は七世紀末に創建され、九世紀前半ごろまで存続したものと考えられている。

野森瓦窯跡は宇佐市大字西大堀字野森に位置する。法鏡寺から北東約五^{トイ}にあつて、瓦陶兼業窯であることが分かっている。灰原部分の発掘が行われ、百済系の軒丸瓦や格子目叩瓦が確認されている。

一一、虚空蔵寺

宇佐市大字山本字経堂に所在する。遺構は宇佐市内を流れる駅館川が作り出した扇状台地の左岸に位置する。

本格的な発掘調査は昭和二十九、四十六年に実施され、その後も継続的に調査が行われている。塔跡は心礎が残存し、径六

〇^{トイ}の柱座が抉^{えぐ}られ、周囲には礎石がよく残っている。基壇寸法は一辺一一・五^{トイ}の瓦積で、八世紀中ごろの瓦が基壇に使用されていたことから、基壇修復の可能性があるかと判断されている。講堂跡は、基壇北側の版築と地覆石列が検出され、南前面には三枚程度の瓦を重ね化粧とした基壇が検出した。このことから、規模は一七・五^{トイ}×二六^{トイ}の大きさであつたことが確認された。塔跡の東側では礎石が発見されているが、詳細については明らかでない。また、中門では柱座作り出しの礎石三個が発見されている。このほか南門に伴う溝や、回廊と考えられる遺構等が検出されており、寺域は一二〇^{トイ}四方と推定されている。以上の建物状況から法隆寺式伽藍配置が想定されている。

出土遺物に軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦と多くの丸・平瓦、埴^{せんろ}伝がある。軒丸瓦は、複弁八弁と複弁七弁軒丸瓦等のいわゆる川原寺系瓦のものと、均整忍冬唐草文軒平瓦の法隆寺系瓦がセット関係として考えられている。他に細弁一六弁軒丸瓦や新羅系唐草文軒平瓦、大宰府系の鬼瓦等が発見されている。最も注目すべき遺物は埴伝で、奈良県法華寺出土の埴伝と同範関係であることが分かっており、畿内地方と密接な関係にあつたことが伺われる。寺院の創建は七世紀末ごろが考えられている。

生産瓦窯は、虚空蔵寺瓦窯が明らかになつており、地番は宇佐市山本で瓦専業窯である。一九九一年に発掘調査が行われ、地下式有階無段登窯であるが、階上部から焼成部にかけて三本

のロストル施設が約一トメほど確認されている。長さ約六・五トメ、幅一・三トメを測り、小田分類の法隆寺系Ⅰ式が四点出土している。

四 各寺院出土瓦と生産遺跡

古瓦研究諸説

九州の東玄関口である豊前地方は、九州の中でもいち早く多くの寺院が建立され、朝鮮半島と畿内地方の文化が導入されたところである。前節で記したように、各寺院から発見される古瓦文様及び技術面に、それらの文化導入の残滓を見い出すことが可能である。古瓦は、以下「朝鮮系瓦」、「畿内系瓦」、「大宰府系瓦」に大別でき、更に細分化される。

① 朝鮮系瓦……百済系・新羅系・高句麗系

② 畿内系瓦……法隆寺系・川原寺系・平城宮系

③ 大宰府系瓦……老司式、鴻臚館式

① 朝鮮系瓦について

朝鮮系瓦については小田富士雄によって論究されており、近年では真野和夫、亀田修一らの私見が述べられている。

1 百済系瓦

百済系古瓦は京都地域で四寺院、山国川流域で二寺院、宇佐地域で二寺院から発見されている。豊前地方発見の軒丸瓦の特徴は、中房に一十六の蓮子を配し、蓮弁は単弁八弁で弁の先

豊前地方出土の各系統古瓦

寺跡名 各系瓦名											
虚空蔵寺	法鏡寺	弥勒寺	小倉池廃寺	塔の熊廃寺	相原廃寺	垂水廃寺	木山廃寺	上坂廃寺	豊前国分寺	椿市廃寺	菩提廃寺
	○	○			○	○	○	○	○	○	○
				○		○				○	○
○						○			○	○	○
									○	○	○
○	○	○	○						○		○
○	○										
							○	○	○	○	
						▲	○	○	○		○
	○	○							○		

端が反転し、その両側が凹んでいる。また、間弁は短く、外縁は一重圈が巡っている。このような特徴ある軒丸瓦は「九州式単弁瓦」と呼称され、畿内で発見される初期寺院の単弁瓦とは趣を異にしている。

小田は蓮弁の形態を三種類（A・B・C）に分類し、Aから順次